

## <寒冷紗と遮光ネット>

### ●寒冷紗

化学繊維を網目状に織った布状の被覆資材のこと。ごく薄く織られているので、植物を覆ってもある程度の日光や風は通す。遮光・防風・防寒・防乾・防虫などに用いる。網目の粗密、色の白黒の違いがあり、用途によって使い分ける。白は遮光・防霜・防虫・防寒・防風に、黒は遮光・遮熱・防霜・防寒に使われる。寒冷紗は遮光ネットと比べ目が細かいので、光が通過するとき回折現象が起こり、光が拡散してしまい、日照強度が弱まってしまう。なので、日照強度を弱める必要がある植物の遮光に適する。

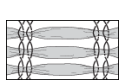
### ☆ハウスでの使い方

- ハウスの外側に張る場合…日射の強弱の調整とハウス内の温度上昇を調整する
- ハウスの内側に張る場合…日射の強弱調整に使われるが、ハウス内の温度が上がるので注意する



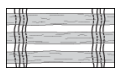
### ●遮光ネット

高密度ポリエチレンで作られた、作物を直射日光から守るために使われるネットのこと。最近では窓の外にカーテンのように下げるなど、部屋の温度を下げる節電グッズとしても人気である。遮光率は、ネットの編み目の大きさによって異なる。目が詰まっているほど遮光率が高まり遮熱効果も上がるが、明るさ、通気性は下がる。編み方は代表的なものでカラミ織、平織、ラッセル編みがある。



#### ☆カラミ織☆(遮光ネットシルバー:遮光率60~65% 2x50mを販売しています)

耐候性、耐久性に優れ、目ずれが少なく平織、ラッセル編みの長所を併せ持っている。軽量で収束性が良いので扱いやすく、ハウスの外張りおよびスライドカーテン等あらゆる用途で使用可能。



#### ☆平織☆(遮光ネット黒:遮光率55~65% 2x50mを販売しています)

耐候性、耐久性に優れ、横糸が縮まずフラットに挿入されているので全体的に遮光率が高い。椎茸、葉タバコの遮光や、酷暑でのハウス内での作業用、および街路樹の防寒やゴルフ場のグリーンカバーにも使われる。



#### ☆ラッセル編み☆(一般園芸向けサイズ各種を販売しています)

耐候性に優れ、編み物なので目ずれやカットした場合の切り口のほつれがない。

遮光率 %	色	遮光弱野菜の	遮光実類の	遮花弁類の	椎茸の遮光	葉タバコの急乾防止	遮イチゴの	茶園の遮光・防霜	育苗用の遮光	作業用ハウスの内	発生・藻止の
35~40	黒	●	●				●				
45~60	黒	●	●	●			●		●		
65~80	黒							●	●		
85~95	黒				●	●		●		●	●
30~45	銀	●	●				●				
40~55	銀	●	●	●			●		●		
60~75	銀			●					●		

## <防鳥グッズあれこれ>



#### ☆ゴールド・タカ☆

ゴールドな反射光で害鳥を威嚇。



#### ☆かかしBOY☆

磁気マグネット入り。ネコ・スズメ・カラスなどに効果的。



#### ☆大型カラス☆

本物に近いサイズ。キラキラ光る目で害鳥を威嚇。



#### ☆トリサッタ2☆

鳥がおびえる悲鳴音と嫌がる音で鳥を追いはらいます。発音間隔を変えられるので、慣れを防ぎ、効果が持続します。



#### ☆目玉風船☆

## <鳥害対策>

### ●防鳥網

防鳥網で作物を覆う最も確実な被害防止策。大規模な露地栽培では実用的ではないが、小規模栽培や果樹栽培では基本技術といえる。防除対象となる鳥の種類に合わせて網目の大きさを選ぶこと、隙間を作らないこと、網を作物から十分離し、たるませないことが大切。網目が小さいほど風雪の影響を受けやすい。

### ●物理的刺激を用いた防鳥機器

強い音声など、物理的な刺激で鳥を追いはらうもの。テグスのように鳥が飛びにくくなるものや、防鳥テープ、磁力による防鳥機器(鳥追磁石)などがある。

### ●生物的刺激を用いた防鳥機器

何らかの生物的刺激によって鳥を忌避させようという技術。鳥の悲鳴(遭難声)を模した音が出る機器トリサッタ2、昆虫の目玉を模した目玉風船、鳥の死体を模した大型カラスなどがある。

### ●化学物質による摂食防止

直播田のような広い面積で播種期に有効な対策としては忌避剤が最も期待される。(キヒゲン、キヒゲンR-2フロアブル)効果は周辺状況などに左右される。

島根県農業技術センターは、デラウェアの果軸褐変症の発生を軽減させる技術対策を突き止めた。1日の適正灌水量である10アール当たり2.5トン(1回、3回、6回に分け、その設定回数ごとに症状の発生を調べた結果、6回に分けた場合の発生率が最も低く、1日の灌水回数を分散させることで軽減効果があることを確認した。

果軸が枯死し、着色不良になる果軸褐変症はハウス栽培で問題となった。これまでの調査で葉面からの水分蒸散と根からの水分吸収量のバランスの崩れが症状の発生を助長する可能性があるとして、1日の灌水回数を多くし、土壌水分の変動を少なくすることにした。

センターが早期加温栽培のデラウェアを対象に実施した比較試験では、1回と3回に分けた場合の果軸褐変症の発生率は40%近かったのに対し、6回の場合は15%と低かった。

担当者は「灌水回数を多くすることで発生が軽減されることはわかったが、あくまでも保水・排水の良好な土壌作りから健全な植物体をつくるのが基本だ」と説明する。<平成24年7月7日 日本農業新聞より>